

四旬節に向けて：小教区黙想会

ジョニー トンバ ディパ神父

日本では、待降節と四旬節に、黙想会を開催する小教区が多いようです。私たちの小教区もまた、この慣例に倣い、この時期に黙想会を実施しています。この黙想会は小教区の信徒の為に開催され、また信徒と共に企画し、実施されるものです。しかしながら、毎回、参加する信徒の数は多いとは言えません。参加するのはいつもほぼ同じ方々であり、ごく少数にとどまっています。大多数の信徒は、ミサの為にのみ教会に来られ、黙想会をはじめとする小教区の他の活動に自ら参加していません。

そもそも、黙想会の実施には多くの準備と労力が伴います。まず、黙想会の指導司祭(または講師)を探し、依頼しなければなりません。次に、指導司祭は黙想会の準備をしなければなりません。それには相応の時間が必要です。さらに、指導者への謝礼も必要です。その費用は小教区の財源から賄われています。それらの費用と時間が十分に活かされないとすれば、それは大きな損失と言わざるを得ません。加えて、養成委員会による会場設営などの実務的な準備も欠かせません。

黙想会は、主任司祭から信徒に対して一方的に課されるべきものではありません。むしろ、信徒の皆様一人ひとりの自発的な歩みとして行われるべきものです。信仰とは自由のうちに選択し、その選択の中で生きるべきものです。そうでなければ、信仰が重荷になってしまいます。待降節においては、救い主を迎える心の準備をするため、また、四旬節において

は、主とともに苦しみつつ回心し、主のご復活をふさわしく祝うための、共同体としての大切な歩みなのです。

灰の水曜日の典礼において、灰を授ける司式者は『回心して福音を信じなさい』と宣言します。私たちには、回心すべき様々な領域があります。黙想会はその一つです。小教区が企画する黙想会に自発的に参加する努力を惜しまないことも、大切なことなのです。それは、共同体として私たち一人ひとりが絶えず回心へと招かれている具体的な場の一つなのです。

黙想会の参加者を増やす為に、ミサと黙想会を併せて行う場合もあります。しかし、本来、聖なるミサは黙想会を行う場ではありません。ミサと黙想会を一体化させることは、結果として目に見えない強制力になりかねません。ミサが長くなり、その結果、信徒の皆様の意図とは無関係に黙想会に参加する形になってしまいます。それは自発的な参加とは言えず、やむを得ない参加になってしまう恐れがあります。そのような形で行われる黙想会にならないよう、私たち一人ひとりが心を新たにし、小教区が企画する黙想会に自ら進んで参加するよう努めましょう。

今年の四旬節の黙想会は、3月1日に姫路教会で、3月7日に佐用教会で行われます。主任司祭として、皆様には是非積極的にご参加くださいますようお願い致します。なお、ゆるしの秘跡(告解)は黙想会当日に限られるものではありません。四旬節の初めから終わりまで、毎土曜日又は毎日曜日のミサ後に、主任司祭は希望される方々のために告解を受けるよう準備しています。また、飾磨、加古川、仁豊野、相生教会、或いは近隣の淳心会の司祭の下で、自由に赦しの秘跡を受けることもできます。皆

様にとって、実り豊かな四旬節となりますようお祈り申し上げます。■